

二月二日石井梅窓先生は六十九歳を一期として急に大往生を遂げられた。本年度に遭遇した一大事であった。たつたこの間御正忌にお元気で聖会に参加され、第一列にあつて、涙して聞いて下さつたのに、これが地上最後の聞法となろうとは。そして一月十九日御出発の時、多少風邪気味にも見受けたが元氣よく出てゆかれた。私は玄関の外まで、家内は己斐駅まで御見送りした。あとで聞けば、福山を發たれる前に近所へ行つて、御葬式のことを頼んでおかれたとのこと。そういえば何時もよりは食欲がなかつたようである。とにかく地上最後の旅が本部への旅、御正忌への聞法の旅であつたのだ。

最後の日が来る。誰にも来る。聞こうと思つても聞くことの出来ぬ最後の日が。聞かれる日に真に聞け。最後の日、一筋に歩んだお念仏の道だけが、永遠を貫きたもことがわかつてくる。

岳父梅窓先生は、極めて消極的な人であつた。いらぬことをせぬ人であつた。事業をおこさず、名利を追わず、静かに静かに念仏した人であつた。岡山より広島の高江の山に移り、あの山の講座で月一回、私をして正信偈を講ぜしめ遂に満講に至つた。県連会長総代の弔辞にもこのことがあつたが、これは実に梅窓先生一代の宏業であつた。

あの頃が一番いい時であつた。残つた子等が父を思つて、涙の中に微笑むことが出来るのはあの頃である。光明団女塾の塾頭として、毎日女塾らに取まかれて、山と本部とを毎日通勤しておられた、あの頃の幸福そうなお姿、白髪頭に鶴のようなおすがた、袴をはいて、ステッキをついて、藤井の奥さんじゃないが、「石井先生のお人柄、あのおすがたの御上品なこと。」誠に女塾の塾頭ははまり役であつた。はじめて梅窓先生の真面目が發揮されたのはあの頃であつた。

山の家は間数も十以上あつて、七十枚から畳がしけた。裏の池には大きな鯉が人の足音でも集つて来ていた。毎月四日には本部から続いて山の講座に行つた。終戦前、いよいよ家を明けなくてはならなくなつた時、近所の人は皆なごりを惜んで下さつた。

至訓院釈忍徳梅窓居士が法名である。御生前「お父さん、あなたがお亡くなりになつたら至徳院釈忍徳梅窓居士と法名をつけまするぞ」「ハイハイ、結構でござりやす」と約束しておいた。しかし汽車の中で考えるのに、忍従ではきつすぎる、忍徳としよう、それでは至徳院ではいけない、通称睦訓の訓をとつて至訓院、至は眞実、訓は教、眞実の教、人はどんな人でも御釈迦さまをまかすようなことをいうのだが、死の彼方まで歩みきらないから、どんな美しい言も喜劇のセリフになるのだ。一道を歩みきつた時、吾々の言葉は至訓となる。

父が残した数々の言は、今や至訓となつて子等の胸に残る。至訓院とする、忍徳梅窓先生のご一生は忍徳につきる。自然の忍徳、多くして貪らず、少くして不平なく、

人をしのがず、与えられて執せず、与えられずして怒らず、身を持つること君子の如し。大言壮語せず、愚痴を聞かず、唯、何事も何事も念仏の中に受取っていられた。釈忍徳とは誠にふさわしい法名である。梅窓とは自ら選ぶところの雅号であった。忍徳の象徴である梅、梅窓とは誠にじっくりとした名実一致の号である。かくして山田英一と生れ出でたる比の人は、六十九年の歩みを通じて至訓院釈忍徳梅窓居士となり、浄土に還帰し大涅槃を超証せられたのである。

二月三日生前の功によつて特に光明団福山支部葬の礼を以て送る。導師は宜山の福専寺殿、それに東西の正覚寺、石州の光善寺、北山の照専寺等参列、同胞親族知友、堂にあうれ、まことにまことにありがたい告別式であった。葬儀委員長たる羽原支部長の弔辞は声涙共に下つて梅窓先生生前の温容を彷彿せしめ、遺族親族同胞をして頭を上げざらしめる。やがて本部代表県連会長総代、全国支部長総代、等々の弔辞あり、皆梅窓先生の徳を讃え、精進を嘆じ、永眠を惜しむ。念仏の声、堂にあうれる中に、式は進められてゆく。会葬者の多い葬儀はいくらでもあろう。しかしかくも念仏にあうれて有難くも大莊嚴につつまれた告別式はまれである。誠に人境相応して、梅窓先生の最後はかくも誠実の真莊嚴によりて最後の幕はとじられた。質素にして誠実であつたその御一生は、忽然として最後に莊嚴華麗なる大光明、金色の空、夕焼の美しさにも似て、質素ではなくてこの莊嚴華麗なる豪華版となる。人は静かに一筋の道を歩みきるべきである。如何に煩惱名利の道は派手に見えても、後には何が残るであろう。幾千万言の美辞麗句も、一片の空言に過ぎぬであろう。今梅窓先生の上に置かれる一句一言はそのままその念仏の人格の表現である。かくしていとも尊かりし岳父梅窓先生の六十九年の最後は、人の誠の散華に埋もれたのであつた。

「皆んな御念仏申しましょう」と言いつつ、最後まで御念仏が絶へなかつた。有難う有難うと感謝しつつ、ただ御念仏のみであつた。あとに残る子等もまた御念仏のみでお送りする。悲しい中にも安らぎがあり、淋しい中にも喜びがある。みんな皆、俱会一処と、一つ世界に歩むのである。親の慈悲の最大なるものは念仏道である。子としての孝道の最たるものは念仏道である。一念仏道の中に親と子と一体に生かされる。死はもとより万人ののがれ難き運命である。しかもその死を契機として安養の淨刹に大涅槃を証得し、永遠に二利双運して群生を度する。死に際会していよいよ不生不滅の世界を感得し、愛別離苦の涙の中より、念仏行者の永遠に別れなきを信証する。

今父の死に会うて、冬季講習に本部に於いて講ぜる、涅槃経の大涅槃の境の大常大樂大我大淨の領域を憶うものである。大涅槃一如の境より願力自然の大用顕現して、我らをして念仏の白道に乗托せしめたまい、本願名号の大船、我らを無上大涅槃の境に運びたもうのである。宿業を負うたる苦惱の子の一生は、なみたいていのことではない。一苦惱又一苦惱、苦惱の山坂の連続である。誰も彼も皆、久遠劫来の宿業の重荷を背負つて、一步一步、西に向つて、大地を踏みしめて歩まねばならない。念仏合掌の中に宿業の全てを受取つて歩む者は、そのままが大悲光明の中にある。

宿業は個性である。個性は善であり悪である。しかしこの個性が普遍的の光に照されて、はじめて善は善ながら、悪は悪ながら生かされるのである。如来は衆生の宿業を撰取して、宿業を宿業として照し出し、宿業の上に生きたもうのである。婆婆とは即ち堪忍土、宿業のままに随順するより外、生きる道はない。これ即ち忍徳である。世尊この世に大慈謙忍の徳を生きたまい、梅窓先生また念仏して、大慈謙忍の徳に生かされ給うた。何という謙虚なる人格であつたであろう。有難き遺訓であろう。

山も村も紫に黄昏れて、金盆西の山の端に赤し。

金色の雲、色うすれゆく時 明星次第に輝く。

悠揚なる哉 莊嚴なる哉。

地上の生の終焉は永遠の生の出発である。

ああ、君在りし日の黙々の精進、

水火二河の間を貫かれた一道の行歩、

その時誰かこの静かなる一道の行歩が、

恒沙の護念証誠の中にあるを知つたであろう。

たつた一人泣くに泣けぬ日を念仏に忍び

たつた一人氷雪の野をほのかなる招喚のみ声に生きぬき

あるいは又春風駘蕩の順境にも一道を失はず

一生相続不退の歩みは遂に今の今

大千応感動の盛儀を展開してみ親のみくにに歸りたもう

蓮華蔵界、弥陀法王、久遠の一子を携えて屋門に入り

檀林宝座に寂静涅槃の本際を極めたもう。

我等五体投地して唯尊容を仰ぎ奉る。